と私が人民に訊きますと、彼等は難船した漁夫はいつでも浪の上にそれが浮んでゐるのを見るのだと答へました、そして、それはたとへ彼等が溺死しても妻子が饑ゑると思つて失望しないためだと云ふのです。で、金函を見たのは難船した漁夫だけで、他の者は誰もそれに近寄つた事さへないのです。それに、先程から皆さんお聽きの如く、女王は金函にどれだけの金が入つてゐるかを誰にもお話しになりませんでした。しかし、皆さんが若し金函に就て疑をお抱きになるなら、私は皆さんが白耳義の海岸に行つて自らそれを御覽になる事をお勸めいたします。そこでは、それ以來海を掘つたり家を建てたりしてゐます。海は今日では堤防や堰で防禦されてゐます。海岸の近くには綠の牧場があり、町が榮えてゐます。燈臺が建つ毎に、港の土が泄はれる毎に、船が作られる毎に、人民はかう考へるのです、「若し金が足りなかつたら、惠深いマリア・テレザ女

王樣のお助をかりやう。」しかし、それは彼等に勵みを與へるだけで、いつでも彼等の金だけで足りるのです。

『皆さんお聽きの如く、女王は金函が何處にあるかといふ事をお話しになりませんでした。皆さん、これはうまい考ではありませんか？　金函を保管してゐる人はあるのですが、人民全部がそれを分ける事を承知しなければ、金函を保管してゐる人は金函が何處にあるか明かさないのです。だから、現在でも、又將來も、その金が不公平に頒けられる惧れのない事が確實です。すべての人民がさう考へてゐるのです。あらゆる人民が、女王は隣りの人を心配してやるのと同じに自分の心配をもしてくれるのだと思つてゐます。白耳義海岸の人民は他の國の人民のやうに喧嘩をしたり羨んだりしません、何となれば彼等は女王の金函の中に同じ頒前を持つてゐるからです。』

大僧正がヴエルナウの言葉を遮りました。

『うまくやつた、』と大僧正は云ひました、『それからお前はどう云つたね？』

『私はかう申しました、』とヴェルナウが續けて云ひました、『マリア・テレザ女王がこのチャルルロイにもお出でなさらなかつたのは殘念だ、チャルルロイの人民が女王の金函を持たぬのは氣の毒だと申しました。人民の企つべき多くの事があるのを思ふ時、海や砂洲の危險を防ぐ必要があるのを思ふ時、人民には女王の金函が必要だと思ふ、と申しました。

『それから？』と大僧正が訊きました。

『馬鹿者が一人二人シイ〳〵申しましたが、その時私はもう講壇から降りて居りました。それでお終ひでございます。』

『お前が神樣の事を云つたのだといふことが、彼等に分つたかね。』

ヴェルナウは默つて頭を下げました。

『眼に見えないと云つて彼等が嘲つてゐる神樣は隱されてゐなければならないのだといふ事が分つたか、眼に見えたら直ぐに罵るだらうといふ事が分つたか。お前はうまくやつたぞ。』

弟子僧は頭を下げて、戸口の方へ退きました。大僧正も喜びに輝やきながら弟子僧の後を追ひました。

『だが、海岸の人民は今でもその金函があるといふ事を信じてゐるのか。』

『信じて居ります。猊下。』

『本當にそんな寶が隱されてゐるのか。』

『猊下、隱されてゐるのでございます。』

『誰が保管してゐる？』

『ブランケンベルグにゐる一人の僧侶が保管して居ります。彼は私にそれを見せました。それは鐵の箍をはめた古い木の函です。』

『で、金は？』

『函の底にマリア・テレザ金貨が二十枚入つてゐるだけでございます。』

大僧正はニヤリと笑ひましたが、直ぐに眞面目な顔をしました。

『そんな金の函を神様に比べるのは宜しくないではないか。』

『物事の比較はあらゆる場合に不完全なものでございます、人間の考はすべて下らないものでございます。』

弟子僧ヴェルナウは今一度頭を下げて、靜かに應接間を出て行きました。

（終）

大正十年九月二十日印刷
大正十年十月二日發行

漁夫の指輪奥附
（定價金壹圓七拾錢）

世界童話傑作叢書
第三編

著者　福永挽歌

發行者　東京市本郷區弓町一丁目二十五番地　茅原茂

印刷者　東京市神田區宮本町五番地　高橋治一

發行所　東京市本郷區弓町一丁目二十五番地
日本評論社出版部
電話小石川一九七一番
振替東京九六七八番

◆日本評論社發行圖書總目錄……往復ハガキにて御申越次第進呈

世界童話傑作叢書

第一編	第二編			
茶碗の一生	魚の舞踏			
福永挽歌譯 定價五十錢壹圓送料拾錢	福永挽歌譯 定價七十錢壹圓送料拾錢			
露國ウオルホーフスキー著、これは平凡なお伽噺ではない、子供ばかりが讀む童話でもない、書中の儲篇悉く無機物を假り來つて、悉く之れを人格化し、偉大なる或るものを含有せしめた民衆的藝術品である。	露國クロイロフ著、第一篇の『茶碗の一生』は世界的に何物かを憧憬する慧く鋭い高級な少年讀者を滿足せしめたのみならず、新しい家庭の總ての人の大歡迎を受けた。本篇に至つては更に深刻、更に清新そして多作をしなかつた此の文豪の此の一篇は人々に感する無價の寶玉の尊さがある。			

トロ14-10

秋田雨雀著

童話 東の子供へ

竹久夢二装畫　岡落葉挿畫

「金の船」は本書を評して『この頃出た童話集中で最も立派なものゝ一つです。この著者は童話の專門作家として立つてゐる人だけに中々骨を折つて書いて居られる。面白い話と云ふよりも本當に子供の爲めになる話を書くのがこの著者です——』と。世の慈愛深き親達におすゝめ致します。

——定價貳圓、送料十五錢——

沖野岩三郎著

童話 頬白の歌

西村アヤ子裝幀及挿畫

高い〳〵山の上に、紅や白の美しい花の咲亂れた、大きな〳〵不思議な樹があつた。其の枝には可愛い頬白が『一筆啓上つきむき候……』の歌を、節面白く歌つてゐる。歌があんまり面白いので、花の下には種んな物が集つて來た。川から這ひ出た黒坊主、熊の腹から飛び出て來た赤ちゃん、鼠の行列を見に行つて高い石垣から落ッこちた小僧さん、腕に怪我して繃帶した小い栗鼠、大きなお腹を太鼓にして踊り疲れた古狸。——そして皆なが、扉を揃へて頬白の歌を面白い〳〵と言つた。

——定價金壹圓七拾錢・送料十五錢——

終